

諸学の根底を変革する岸田歴史学

永田和弘 2013.12.9.

「こんにちは、西独の若い世代の歴史家の間では、ドイツの「伝統的歴史学」と明確に対決する「社会科学としての歴史学」、「歴史主義の彼方の歴史学」が、主張されている。」これは岸田達也先生の『ドイツ史学思想史研究』（ミネルヴァ書房 1976）まえがきの書き出し部である。端的に言えば、「歴史主義」と「科学主義」とが対決する様子を描いた導入部である

「事実の一つ」を素朴に考えていた私は、科学的究明こそが進歩の歯車であり、一里塚の積み重ねこそが目標に至る確実な方法と考えていた。しかし、科学化とは、人と人の行為(歴史)を物化する処理である。人と人の行為(歴史)を理解するためには、科学的手法によってではなく、同じ人である歴史家の魂(たましい)によってである。(岸田達也)

このことは、医療の世界においても同じことが言える。人が疎外された現代の医療への警鐘は発せられても、ではどうしたら人間本位の医療になるかは分からなかった。

殊に、歯科医療の欠損補綴(入れ歯治療)においては、考え方が歴史学に共通するところが多い。「失われた歯の部分をもどのように再現するか」は「失われた過去をもどのように再現するか」と置き換えれば、歴史家の歴史観はそのまま歯科医師の補綴観となる。

岸田達也先生の『ドイツ史学思想史研究』に魅せられた私はミネルヴァ書房に連絡を入れた。書房からは、「岸田先生の連絡先を直接には教えることはできないが、私(永田)の要件と電話番号を岸田先生に伝えることはできる」と返事があり、間もなく岸田先生から電話が入った。「近いうちに伊勢市の皇学館大学で講義があり、聴講してみませんか」とのお誘いがあり、天にも昇る気持ちで飛びついた。講義当日、皇学館大学の 224 号室前の廊下で初めてお会いした。1982 年 7 月 14 日第 1 限前のことである。「西洋歴史思想の展開」は以後の私を大きく変革することになる。「歴史思想」は「哲学思想」と深く関連しており、「歴史思想」は「諸学の根本命題」とも関連している。「歴史思想」はそれぞれの歴史家の生き方に基づいているために、歴史を学ぶ者にとって生き方・考え方に深く影響を与える。

歴史に対するまなざしは変化してきた。歴史が軽く見られたデカルトの時代から、歴史を科学の範疇にまで変革した今日に至るまで、歴史は大きく変化した。この中で、歴史を事実のみならず事実の背後からのパースペクティブな理解を重要視する「岸田歴史学」は特異なものである。歴史を通して歴史を観る。そこには歴史家自身を変革する歴史がある。歴史家のみならず、あらゆる分野でも同様のことが起こる。歴史は諸学の母たる学。歴史の眼は諸学の眼。いわば、歴史は諸学の根底を変革することを「岸田歴史学」は教えている。

『ドイツ史学思想史研究』が私の人生を変えることになろうとは思ってもよらなかった。

歯科医師の私が歴史学に関心を寄せるなどとは考えられなかったからである。同じことは職種を問わずに、「岸田歴史学」に接するすべての人に起こることだろう。「岸田歴史学」をもっと多くの人たちに教えてあげたい気持ちである。私の微力では壮大な先生の世界は持ち上げられない。せめて、皇学館大学の「西洋歴史思想の展開」だけでも出版できないものだろうか。録音テープとテープ起こしたノートが手元にある。恐らく、先生の肉声を記録した数少ない遺品ではあるまいか。

非才の教え子であることを詫びると共にご冥福をお祈りいたします。

合掌

永田和弘